

恋愛観の一考察、我と汝と愛

——我と汝だけの蓮は現世にあるのか——

ジュリー・ブロック

1

フランス人としての私には、恋愛の話を含んだ日本文学において、江戸時代から現代に至るまで、心中や自殺がしばしば起こることということが、一番の驚きである。フランス人の比較文学者アレン・ウォルター¹の『日本古典文学における恋愛』という論文を読んでみても、このような愛し合う登場人物の悲劇的な運命が、日本文学における恋愛の特徴として数多く論じられている。例えば近松門左衛門²や井原西鶴³などである。まして、井原西鶴の物語の多くが実際の出来事を基にして書かれているので、江戸時代における社会は愛し合うことに対していかに厳しいものであったかを示していると言える。これに比べると、西洋における恋愛の概念の方が伸び伸びと発展したように見える。「個人」「自由」などの概念が同時に発展したのも、恋愛の考え方と無関係ではないだろう。

フランスにおける最も古い恋愛の物語は『トリスタンとイゾー』⁴というものである。ドニ・ド・ルージュモンが『恋愛と西欧』(邦訳は『愛について』)を通して明らかにしているように、ダンテ、

ペトラルカ、シェイクスピア、ルソー、ゲーテ、スタンダールなど、つまり現代に至るまでの全ての西洋文学における恋愛の概念は、この『トリスタンとイゾー』に始まっている。この概念の特徴を要約すると、「情熱的」「絶対的」「永遠的」などの言葉が当てはまるが、中世の12、13世紀の南仏吟遊詩人や騎士道精神、騎士道的恋愛物語に遡ることなしには、これらの言葉の意味を理解することはできないのである。当時流行したカタル派の宗教は、異端として激しく迫害されたため、彼ら教徒たちは恋愛という形を借りて、神に対する愛をうたっていた。その影響で、ロマンティックな響きを持つ「絶対的な愛」という概念が恋愛の中に持ち込まれたのである。

このことをマルチン・ブーバーというユダヤ人の思想家が、より哲学的な言葉で論じている。彼の著書『我と汝』の中ではまず、極めて簡単に言えば、「我」と「汝」との間には、見る側の主体と見られる側の客体という関係があり、これが普通の状態である。ところが、この二人の間に愛が生じた瞬間は、二人が同時に見る側の主体となって、二者対立の関係が消えてしまうのである。

これに関してブーバーは「満ちあふれた情熱のうちで抱擁しあつ

ている、恋する男女の我を忘れた歓喜」という状態を例にして次のように説明している。ここでは訳文を直接引用したのでは抽象的すぎるので、言葉を補いながら述べることにする。

「この深い陶酔のさなかで、二人の人間のそれぞれの側で、我と汝とを区別する意識は、ある種の一体感のうちに消えていく。」ここで言われている「一体感」が、なぜここで重要かと言うと、ヨーロッパ文学における恋愛観の鍵となっているからである。すでに、13世紀のドミニコ派のキリスト教神父エックハルトが、この「一体感」を「一と一とがひとつになり」という言い方で表現していた。エックハルトによれば、ひとつになった瞬間に「あらわなるものがあらわなるものの中で光かがやく」と続けていることから、「一体感」は、神と通ずる概念であることが分かる。

「ひとつになる」ことを「一体化」と言い換えて、ブーバーはもっと分かりやすく、身体的な感覚と結び付けた表現で次のように言っている。「二者対応がもはや意識されなくなる出来事は、関係行為そのものの、あの究めつくせぬ特質が神秘的に体感される場合に起こり、そこでは、二つのものが一体化し、エックハルトの言うような『あらわなるものの中で光り輝く』といった幻覚が生じる。」

この幻覚によって、神に近付いていく様子を次のように言っている。「いまさつきまで神性に向かい合っていた人性は、神性のなかに昇華し、その栄光化と神化が行われ、全一性が発現するのである。」ここで注意すべきことは新しく出てきた「全一性」という概念である。これもまた、ヨーロッパ的な恋愛の重要な言葉で、一般的に、完全な経験として理想とされているが、根本的にはブーバーが示しているように、二人の人間が一体化し、その瞬間に神の光に包まれ

て、あらゆる困苦が無くなる、つまり完全に幸福な状態が訪れるという考え方なのである。

ブーバーの考えでは「全一性」は、「一体性」に基づいているが、「一体性」そのものは、何度も繰り返しているように、「二者対応がもはや意識されなくなる」または「我と汝とを区別する意識が消えていく」つまり「我と汝が没し消えてしまったとき」に初めて生じるのである。この状態は次のようにも言い表わされている。「恋する二人の間で、二人の間の関係そのものの生命的一体性が極めて強烈に感覚されるので、この関係そのものの生命のために、関係のそれぞれの項、すなわち我と汝とが忘れ去られるのである。」

2

このような全一性の発現としての恋愛という事態はヨーロッパの中世から現代に至る恋愛を根本から特徴付けていると言えるであろう。ところが、日本ではこのような統一的な神は存在していない。神があるとすれば、神道なら様々な神であり、仏教なら人は亡くなった後、仏といわれる神になる。それでは、一と一とがひとつになることは日本人には不可能なのであろうか。あらわなるものがあらわなるものの中で輝く光は、日本人には見えないものなのであろうか。このような比較的な観点で、ヨーロッパと日本の恋愛観についての差異に焦点を当てれば、多種多様な議論ができるであろう。しかしここでは、むしろ、異なる文化の共通点を探し出し、それに焦点を当てることによって、人間が根本的には恋愛を通して何を求めているのかという、普遍性に向かった議論を試みようと思う。

2001年から国際高等研究所で行われている「東西恋愛文化」についてのシンポジウムにおいて、中川久定氏が『恋愛』の永遠化をめぐるという題で『トリスタンとイゾー物語』と近松門左衛門の『曾根崎心中』の比較を行った。前者ではトリスタンの墓からイゾーの墓へと伸びていくバラの枝、後者では二人が心中したときに自分たちの体をくりつけた、二本の木が一本になった相生（あいおい）の描写を取り上げ、次のように言っている。「人間の束の間の生を越えてなおも生き延びる植物のかたい結び付きという象徴をおして、ともに恋愛の永遠化を文学的に表現している」。

もう一つの例として、加藤周一による『日本文学史序説』の中の、一休宗純の詩についての解釈を挙げて説明してみようと思う。一休の『狂雲集』に集められた詩のいくつかは、好色の詩、特に、晩年一休の侍女であった盲目の女性、森との恋を詠った詩であり、生まれ変わって三度生を送ることを約束した二人の深い情愛が表現されているものである。それを指摘して、彼は次のように分析している。15世紀の禅宗の世俗化の時代に一休宗純だけが、宗教的感情を肉体化し、肉体的な愛の中で感覚的な陶醉として体験し、独創的で孤独な詩的世界を作り上げた。鋭く絶対化された禅の「イデオロギー」と肉感的な愛の陶醉とのつくる詩の世界では、一夜は百千年になり、時間を超越して「永遠の今」となる。加藤氏が明らかにしているように、これらの詩の中にも永遠化を求めるような恋愛観を見出すことができる。

一休宗純の考え方は、加藤氏が強調しているように、独特なものであるが、より世俗化された一般的意味での仏教の世界がもたらす無常観に溢れる悲劇的な恋愛の中にも、永遠に対する希望を持って

いる人物の姿を見出すことができる。例えば、近松門左衛門の『心中天の網島』の中で心中することを決意した小春と治兵衛が、「くればくるほど冥途の道が近づく」と言い合いながら、船で川を下っていく場面で、治兵衛はこのように言っている。「何か嘆かんこの世でこそは添はずとも未来はいふにおよばず、今度の今度のつと今度のその先の世までも夫婦ぞや。」¹⁰『曾根崎心中』の中にも心中の場面があるが、ここでは、より仏教的なイメージが伝わってくる。「神や仏にかけおきし、現世の願を今ここで未来へ回向（まごころ）し、後の世もなほしも一つ蓮（はちす）ぞやと。」¹¹同じ蓮の葉の上で生まれ変わりたいという願いは、仏教を特徴するメタファーであり、まさに宗教的な永遠が恋愛と結びついていることが分かる。

もう一つの例は井原西鶴の『好色五人女』における「恋草からげし八百屋物語」に登場するお七の言葉である。16歳のお七と17歳の吉三郎が初めて出会ったのは火事の騒ぎのおかげであった。彼女はもう一度吉三郎に会いたがために、お寺に放火してしまう。この罪でさらし者にされ、最後は火刑に処せられてしまうのだが、亡くなる前に残した言葉を彼女の母親が吉三郎にこう伝えている。「吉三郎殿がまことにわたしを思ってくださるのなら、浮世をお捨てになり、どのような御出家にでもなってください、このように死んでゆく私の後世をうけてくださるならば、どれほど嬉しいか、そのお情けは決して忘れることはありません。二世までの夫婦の縁は決して空しくなることはありません¹²。」この例は心中ではないが、成仏を祈り続けることによって恋愛の永遠を願っていることに変わりない。どの例も、この世で夫婦になれなかった二人が、あの世での夫婦の永遠を望んでいるのである。

しかし、井原西鶴の作品を見ると、後の世に対するあこがれと同時に、社会に対しての批判が含まれていることがわかる。次の例は『好色五人女』における「中段に見る厩屋物語」の中の引用である。不倫関係にあるおさんと茂右衛門は、心中に見せ掛けて一緒に遠い田舎へ逃げる。最後は捕まって死刑になってしまふのであるが、ここで指摘したいのは、おさんが茂右衛門に心中を持ち掛けて言った言葉である。「とにかく世にながらへる程、つれなきことこそまさき、この湖に身を投げて、永く仏国の語らひ。」¹²ともかくこの世に生き長らえるほどつらい事がつるばかりであるという理由からは、積極的に仏国での幸福を求めているのではなく、飽くまでも追い詰められ仕方ないという消極的な選択であったことが、ひしひしと伝わってくる。しかもこの言葉のすぐ後で茂右衛門が、芝居打って遠くで年月を送らないか、と提案すると、実は私もそのつもりだった、とおさんも喜んで本音を漏らすところから、心中が本心ではなかったことは明らかである。また、作家自身がおさんを通じて自分の本心を語り、当時の社会を諷刺していると言うことも出来るであろう。

恋愛を通して人間が何を求めているのか、ここでもう一度問い直す、よほど仏教的な信仰心の強い人の中には自殺や心中などによって後世での永遠を願っていた例もあるに違いないであろうが、実際は、恋人達は悲壮感の中でやむを得ず諦めや絶望と共に悲劇的結末へ向かったに過ぎず、本音は現世での喜びを願っていたのではないか。仏国へのあこがれや期待は、裏を返せば現世に対する諦めや否定にも見える。いずれにせよ、命を絶つことは究極的な選択であるに違いない。

3

ここまで見てくると、日本文学においては「永遠性」、西欧文学においては「絶対性」という言葉が、それぞれの恋愛の特徴を説明する概念として当てはまりそうである。ここで、西欧においての「絶対性」という概念がどこから来るのかを考えてみると旧約聖書の十戒が思い出される。出エジプト記の中では、神がシナイ山でモーゼに次のように言う。「あなたには、わたしをおいて他に神があつてはならない。」¹³これによつて神の唯一性が定義されるとともに、「他に神があつてはならない」により、神の絶対的本質も示されているのである。

付け加えると、神は次のように続けている。「私は熱情の神である。私を否む者には、父祖の罪を子孫に三代、四代までも問うが、私を愛し、私の戒めを守る者には、幾先代にも及ぶ慈しみを与える。」¹³この言葉を読むと、中世の南仏吟遊詩人が詠っていた神との愛がいかに「情熱的」「絶対的」「永遠的」であるかが分かる。神と人間との間の愛を直接に人間同士の愛に転換するという話はいささか行き過ぎであると思うが、敢えてこのような仮定で恋愛関係を再考してみると、先に述べたエックハルトの「一と一とがひとつになる」またはブーバアの「我と汝が一体化し、全一性が発現する」などの言葉が一層深みを増して響いてくる。このように見ると西歐的な恋愛における特徴は、唯一性、一体性、全一性、絶対性、などの哲学的な言葉で定義することができる。しかし実際は西欧文学に登場する人物が恋愛を通じて何を求めているかという問いに戻ると、神がモーゼに聞いたように「我と汝だけの間の愛」ではないかと考えられ

る。したがって、唯一性、絶対性という概念においては、排他性が含まれていることも認めなければならない。

同じ蓮の葉の上で生まれ変わりたいというような言葉が示している通り、我と汝だけの愛を求める恋人達が日本にもいるが、江戸時代の社会においては真にそれを実現しようとすれば、自分たちを完全に社会から切り離す手段しかなかったのである。そうした排他的な恋人達に対して社会の側も排他的であった、すなわち相互に排他的であった結果、「我と汝だけ」という関係は、むしろ西欧の場合より浮き彫りになってくると言うことができる。推し進めて考えると我と汝だけの関係という絶対的、排他的な愛は日本の恋人にも、西欧の恋人にも、そして世界中の恋人にも一番普遍的な欲求と言えないのではないか。ただし、西欧ではそのような関係を結ぶことの出来る相手と出会うことが人生の中で最上の幸福のように考えられているが、江戸時代の日本では「死ぬほど愛する」相手と出会うことは現実的には最上の不幸となってしまうたのである。

このように、恋愛における絶対性そのものは、日本の伝統的な恋愛文化の中にも抑圧された形で存在していることは明らかにしたが、未だに恋愛に関する物語の中には、悲観的傾向が残っている。それを示すために、二度に渡り話題となっているテレビドラマ『高校教師』のような例を見て見よう。¹⁴生徒の女性と教師の男性が、生まれ変わったら互いを探しあうという約束を結んで心中に向かう。まるで西鶴や門左衛門の登場人物のようである。自分たちの恋愛関係を振り返って語る教師の次の言葉の中にもまた、反社会的な考え方が表われている。「社会が作った責任や、奉仕という偽善、抽象的で、感傷的な、愛や永遠などという言葉さえも、僕達にとっては

何の意味もなかった。」こうした恋愛感情によって生まれた個人的な関係は、社会の枠組みにそぐわない側面が多く、殊更日本のような集団主義的社会においては制約が強いので、有害となり得る危険性を孕んでいる。鑑賞者の中で、いかに「個人」や「自由」への希求があっても、この二人のような異端的な関係に至ることに對しては恐れを抱くのが当然である。「僕は、彼女の背負っている孤独な悲しみに潜む透明な淵に転がり落ちるように沈んでいった。」この孤独という淵に閉じ込められている彼女が、生まれてから今まで決して愛されることがなかったということもドラマでは描かれていく。彼は、この淵を取り払うことが出来ず、そこに自分も入っていくしかなかったため、二人は愛し合うことに對して情け容赦ない世界を後にしたのである。この物語では、個人と社会との間に生じた淵から抜け出すためには死ぬより他なかったことが分かる。これが日本における伝統的な恋愛文化の象徴である。

現代日本の恋愛の観念はこのような江戸時代からの風潮を受け継いでいるものがある一方で、大岡昇平が指摘しているように、「明治以来キリスト教と一緒に入ってきた」¹⁵ものもある。新約聖書のコリントの信徒への手紙を読んでみると、「信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中で最も大いなるものは、愛である。」¹⁶とサンポールが書いている。仏国に幸せを求めて心中する恋人達のためには宗教的信仰や希望が救いになるであろうが、サンポールによれば、この世で生きていく人々にとっては愛への信仰や希望しかない。恋愛文学は大岡昇平の言葉を借りれば「今日、宗教にかわって猛威をふるって」発展している。日本に限らず、現代社会の人々は何を共通に求めているのか、何が彼らを駆り立てるのか。

それは誰もが持つている孤独の淵から抜け出す道ではないであろうか。孤独から抜け出すのなら、死ぬことを除いては、愛のほかには道があるであろうか。

謝辞 本稿の日本語校正、脚注作成等に、本学大学院博士課程修了の梁川健哲氏に御協力頂きましたことをこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

- | | |
|--|--|
| <p>注</p> <p>1 Alain Walter, Bordeaux 第三大学 比較文学教授</p> <p>2 Walter (Alain) アレン・ウォルター <i>Erotique du Japon classique</i> 日本古典文学における恋愛 Paris, Gallimard, NRF, Bibliothèque des idées, 1994.</p> <p>3 近松門左衛門 (1653-1724)</p> <p>4 井原西鶴 (1642-1693)</p> <p>5 現代語訳の『トリスタン・イゾル物語』ペディエ編 佐藤輝夫訳 岩波文庫 昭和28年 (「イゾル」はフランス語での発音。ドイツ語では「イゾルデ」)</p> <p>6 ドニ・ド・ルーシュモン (Denis de Rougemont) 『愛の心理学』(L'Amour et l'Occident) 鈴木健郎 川村克己 平凡社 1993</p> <p>7 マルチン・ブーバー Buber (Martin) 我と汝 田口義弘訳 Ich und Du みすず書房 1978, p.p.114-116
「トリスタンとイゾル」</p> <p>8 一休宗純 狂雲集 狂雲集全釈 上 平野宗浄 春秋社 1976, p.90,91</p> <p>9 加藤周一 日本文学史序説(上) 筑摩書房 1999, p.p.375-378</p> | <p>10 近松門左衛門 心中天の網鳥 日本古典文学全集44 近松門左衛門集 二鳥越文蔵校注・訳 小学館 1972, p.503</p> <p>11 近松門左衛門 曾根崎心中 日本古典文学全集43 近松門左衛門集 一 森修鳥越文蔵 長友千代治校注・訳 小学館 1972, p.79</p> <p>12 井原西鶴 好色五人女 日本古典文学集38 井原西鶴集 一 暉峻康隆 東明雅校注・訳 小学館 1971, p.329 367 397 401 402</p> <p>13 聖書 新共同訳—旧約聖書続編つき 日本聖書協会 1991, p.(旧)126 (新)317</p> <p>14 高校教師 もう一つの蘭の物語 吉田健 監督 野島伸司 原作・脚本 東宝映画 1993.</p> <p>15 大岡昇平 大岡昇平全集14 評論 I 筑摩書房 1996, p.p.190-193</p> <p>16 聖書 新共同訳—旧約聖書続編つき 日本聖書協会 1991, p.(新)317,13.1</p> |
|--|--|